



# フレネ教育の成立と展開に関する歴史的考察

枝廣, 直樹

---

(Citation)

教育科学論集, 28:21-29

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100495637>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495637>



# フレネ教育の成立と展開に関する歴史的考察

## A historical study of the establishment and development of Freinet education

枝 廣 直 樹\*

EDAHIRO Naoki

(\*人間発達環境学研究科博士課程後期課程大学院生)

キーワード：フレネ教育 Freinet education, スコラ教育 scholastic education, 新教育 new education, 興味の複合 complex of interest, フランス教育史 history of French education

### はじめに

本稿では、フランスの時代背景を元に、フレネ教育の成立と展開の様相を明らかにすることを目的とする。

セレスタン・フレネ (Freinet C., 1896-1966) は1937年、論文「もう教科書も授業もいらない」において次のように述べる。

「スコラ教育 (scolastique) の大きな誤りは、私の考えでは授業であり—また、これに由来する宿題という考え方である。われわれが投げ捨ててしまおうとしているのは、周知の通り伝統的学校の教育技術全体であり、時には寛大であるような場合も含めて、幻想の過去すべてを捨ててしまうことに、何らの懸念もいっていない<sup>1)</sup>」。続いてフレネは「授業はやらない」と宣言し、要約暗誦、宿題、罰や制裁を否定する。ここでフレネが指しているのは伝統的授業形態であり、伝統的授業をしなければ「指導要領や時間割に組み込まれた教科内容を説明するために大声を出したり、神経を擦り減らすこともなくなるでしょう<sup>2)</sup>」と言う。また、フレネはスコラ教育への批判から生み出した自らの教育を「現代学校 (École Moderne)」と呼び、新教育による「新しい学校 (École Nouvelle)」と一線を画した教育を展開していく。

それでは、フレネの言うスコラ教育や伝統的授業形態とはどのような性格を持つものであったのか。新教育との関係はどのようなものであったのか。また、フレネ教育の成立と展開の過程においてスコラ教育と新教育はいかなる影響を与えたのか。

本稿では、フランスにおけるスコラ教育と新教育がフレネに与えた影響を考察する。第1節において、19世紀末から20世紀初頭のフランスの初等教育史を概観し、フレネが批判したスコラ教育がどういった形で形成されたものであったかを整理する。第2節において、フランスにおける新教育の流れを整理する。第3節において、フランスにおけるスコラ教育と新教育の流れを踏まえ、フレネの生涯を概観し、フレネ教育の成立と展開への影響を考察する。

### 1. フランス教育史にみるスコラ教育

本節では、フレネの生まれた頃のスコラ教育<sup>3)</sup>がどういったものであったのかを考察するため、19世紀末から20世紀初頭のフランス初等教育の様子を見ていく。

#### (1) 第二帝政下の教育とデュリュイの教育改革

フランスの学校は、伝統的にキリスト教会堂を核とする地域共同体 (コミューン) を基本的な構成単位としている<sup>4)</sup>。アンシャン・レジーム期に生まれたデカルトの合理主義的自由思想は、教会へのスコラ学批判の上に、フランスの学校に浸透していく。「我思う、ゆえに我あり」の合理的自由思想は、1) 主体性、2) 主知主義を重要なサブ原理とする。ここにナポレオンの第一帝政時代に固められたエリート教育主義が加わり、初等教育が重視されることはほとんどなかった<sup>5)</sup>。

19世紀初頭まで主流であった相互教授法での教師の役割は合図を送ったり、机を棒で叩いたりして授業の展開を区切り、リズムをつけることであった。ところが、19世紀中頃になって、初等教育で教師は述べ、読み上げ、中高等教育でしか行われなかった口頭での説明、教育的説明が市民権を得ようになる。同じ頃から「生徒に話させる」教育が導入され、生徒に話しかけ、生徒に話させながら、教室の静穏を維持する能力が教師に求められるようになる<sup>6)</sup>。

1833年、大臣ギゾー (Guizot G.) による初等教育法が制定される。これは子どもの未就学や子ども労働の問題の解決を狙ったものであった。ギゾーは教育の画一化に向けて教科書の統一を図ったが、小学校は地方自治の顕現として、政府により作成された教科書以外の使用を制限するものではなかった<sup>7)</sup>。

1850年、ファルー法の成立により、公立学校と自由学校 (私立学校) の共存が図られる。ファルー法は教会の利益解放をもたらした、非宗教的な私的中等教育施設の衰退を引き起こした。また、聖職者の資格がそのまま初等教員の資格たりうるとされた<sup>8)</sup>。

第二帝政下において、ナポレオン3世 (Napoléon III) は教会に極めて好意的な態度を示す一方で、高等教育や共和主義に執着する初等教員を排除すべく、教育の人事権を中央に集中させ

た<sup>9</sup>。教会の意向に沿う形で、教員には質素で威厳のある身なりが強く要求された。

当時18%の子どもが小学校に就学せず、就学しても34%は年に半分しか学校に行っていない。就学を終えても13%の子どもは読み書きができず、26%は読み書きしかできない。産業革命を迎えたフランス社会において、社会の下層に押し込められた悲惨な子どもをどう救うかが深刻な問題であった。博愛家は人間の品位と人道的見地からこの問題を憂慮したが、為政者や工場主は身分的序列社会の維持と安定の見地からこの問題を憂慮した<sup>10</sup>。

1863年ナポレオン3世はデュリュイ（Duruy V.）を公教育大臣に任命、初等教育の義務化と完全無償化を目指す。1867年の法律により、無償制の拡大、学校金庫の創設、教育内容の充実などが図られる。デュリュイの改革は産業革命に後押しされ、「学校で獲得する知識は時代のうみだす新職業において、いや畑仕事や職人の仕事においてすら、必ずや好ましい結果を生ぜしめる」ということが農村において認められるようになっていった<sup>11</sup>。また彼は、リセ・コレージュ（後の中学校）と初等学校の間にはひとつの深淵があり、この深淵に橋をかけなければならないとし、1865年「専門的中等教育」を法制化する。これによりデュリュイはすべての人がその社会的地位に応じて教育されることを期待した。彼は教会が囲ってきた女子への教育の門戸も開き、初等教育に関する予算が60%伸びるなど1880年代の第三共和制の改革に確実に結びついていく<sup>12</sup>。

## （2）パリ・コミューンとフェリー改革、20世紀初頭の小学校

1870年の普仏戦争により、労働者を中心としたパリ民衆は第2帝政を倒し、共和政の樹立を宣言する。1871年休戦条約締結後、正規軍（臨時政府）と国民軍（民衆）は対立し、国民軍が勝利、3月にパリ・コミューンの成立が宣言される。コミューンは同年4月、教会と国家の分離、宗教予算の廃止などを決め、学校における宗教教育は禁止された。コミューン管下の「新教育協会」は無償教育、義務教育、世俗教育の民主主義教育の3大原則を謳っている。パリ・コミューンは2ヶ月余で崩壊したが、コミューン以後、労働者の階級闘争は大規模化し、社会主義的要素を強めていく<sup>13</sup>。

1879年に文部大臣となったフェリー（Ferry J.）は、1881年初等教育の資格証書に関する法律を施行した。これにより聖職者の教員試験免除規定は効力を失い、1882年には初等教育の教育課程から宗教教育を排除し、教育の世俗化が前進する<sup>14</sup>。1886年「無償、義務、ライシテ（laïcité、世俗）」の3原則を前提に、「初等教育継続法」が成立する。1887年小学校教育課程の教育方法に関する規程において、「初等教育の拠点」は「直観的であり、実質的である」として、自発性・主体性をさらに発展させる直観的方法が盛り込まれている<sup>15</sup>。20世紀初頭には地方自治体の99%が公立小学校を設置している<sup>16</sup>。

1894年のドレフュス事件以来、政府は教団、宗教団体立の小学校に抑圧政策を行ったが、20世紀初頭においても依然2割に

あたる20879校の宗教立小学校が存続し、政府との血なまぐさい戦いがいくたびか繰り返された。

第一次世界大戦中、戦時における将兵間の協力が円滑にいかない原因を、社会階層により子どもを振り分けてきた複線型学校制度に見た一群のブルジョワジーの軍人がいた。彼らは1918年にコンパニオン（compagnons）を作り、階級による振り分けではなく、全ての子どもに共通の教育を提供する統一学校制度実現のための運動を起こす。文部大臣の尽力や、進歩的文化人、国民大衆の支持を得て、1926年にリセおよびコレージュの初等教育課程と小学校の教育課程が統一された。

当時の小学校は初級（7-9歳）、中級（9-11歳）、上級（11-13歳）の3等級にわかれており、基礎から応用へと段階を設けている。11歳に達した児童は試験により初等教育修了証を取得することができた<sup>17</sup>。教室は50名を最大限として計画され、教科書は教員みずからがその経験と責任において、使用教科書を選定するという制度を取っていた。就学率は19世紀末には96%に増加、しかし就労、家事手伝いなどにより辞めていく児童も多く、実質的には70-80%にとどまり、僻地県では50%を割ることもあった。当時の小学校においては軍隊的な規律が保たれた。例えば児童は2列縦隊で歌を歌いながら教室に出入りした。教員や部外者に対して礼儀正しくすることも徹底された。体罰の使用は禁止されたが、それに変わり、レクリエーション参加停止、放課後居残り、一時停学などの措置が講ぜられた。中央集権は徹底しており、文部省にいと今、小学校の何年生の何曜日の何時間目は何を教えているかわかるというくらいであった<sup>18</sup>。命令を無批判的に実行する訓練・しつけの役割に重点が置かれていたのが、19世紀末から20世紀初頭にかけてのフランスの学校の姿であると、古沢（1986）は指摘している<sup>19</sup>。

## （3）スコラ教育へのフレネの眼差し

当時のフランス教育を概観すると、以下の特徴にまとめることができる。

- 1) エリート教育の重視
- 2) 伝統的な複線主義
- 3) カトリック教義の教育利用
- 4) 国家の中央集権主義
- 5) 主知主義の伝統
- 6) 国民（労働者階級）の反発

フランスにおける20世紀初頭のスコラ教育は、エリート教育の重視とカトリック教義、主知主義の伝統があわさった、厳格で節制を心がける性格を持ったものと言える。学校と教会が合わさり、明確なイデオロギーを持った教育、つまり「教化のための教育」がなされてきた。それまでエリートの養成で十分であった教育は、産業革命を経て、社会の生産を支える労働力としての民衆教育の必要性に迫られ、「どうやって国民を支配下に置くか」という命題をフランス国家が抱えるようになった。ブルジョワ

ジーやエリートに対して行われていたスコラ哲学を元にしたキリスト教的な伝統的・厳格な教育は、民衆に当てはめられるようになる。

一方で、中央政府や教会に対する国民（労働者階級）の反発が一定程度認められてきたことがフランス教育の特徴として挙げられる。例えば教科書も統一の動きがありながら教師の教科書選定の自由は認められてきた。中央集権体制をとりながら個性重視や教育の自由を原理とするところにフランス教育制度の特徴がある<sup>20</sup>。上記1）から5）の中央政府による推進と、厳格な教育に反対する6）国民の反発が常にありながら、スコラ教育は幾度もの主体的な教育への揺り戻しの中で少しずつ道を歩んできたといえる。20世紀初頭のフランスにおける主体的な教育の最先鋭とされるのがフレネである。

フレネは1896年、南フランスのアルプ・マチリム県、ガールの村で生まれた。そこはニースの街から山岳地に入り込んだ、半農半牧畜の小さな村である。家は羊飼いと農業を営む農家であり、フレネは大自然の中で羊飼いをしながら幼少期を過ごす。フレネは子供の頃を回想し次のように語っている。

大気を胸いっぱいすって、私たちは学校への道をゆく。自分たちの現在と未来の生活とかかわって深い意味を持つ様々な仕事、自然の遊びや小鳥の歌声が私たちの心を満たしていた……。私たちは学校に近づく。確かに独創的な考えが尽きることはない。鋭さとユーモアに満ちたことばが次々とび出す。良きにつけ悪しきにつけ、やりたいことが山ほどある。その時突然、鐘が鳴る。それはたちまち私たちの存在に空白のようなものを引きおこす。生活はそこでストップし、学校が始まった。新しい世界、私たちが生きてきた世界と全く違った別の規律、別の義務、別の興味、いやもっと重大なことには、そこには劇的と言えるほど興味の存在しない世界<sup>21</sup>。

フレネはこの記憶を持ち続け、自分が教育する子どもたちを子どもとして感じ取り理解できることを、自分の教育者としての唯一の才能と表現している。彼が感じた「スコラ教育」は「私たちが生きてきた世界と全く違った別の規律、別の義務、別の興味」の存在する場所であった。つまり羊飼いの子として、幼少期のフレネに大きく君臨していた「自然」と対立するものとしてのスコラ教育が浮かび上がる。そして、それは「劇的と言えるほど興味の存在しない世界」であった。フランスの公立小学校で行われていた授業、すなわち命令を無批判的に実行する子を育成するためのスコラ教育に対して、いかに子どもの興味を持たせる授業ができるかという問題関心が彼に生じたのである。

著書『学校を現代化する』においてフレネは、「伝統的教育法では、どうやってペンを持つかを大人が教えてやらなければ、子どもは書くことができないし、順序よく分類された観念を与えなければ、子どもは作文できないという信念に立っている<sup>22</sup>」とし、現代的教育学と伝統的教育学の差異はここにあると言う。彼は非難対象として2点あげる。「誤った科学の産物である教科

書」、「唯一尊重されるべき実験的試行錯誤をことばや公式に置き換えてしまう権威的な授業」である。フレネにとってのスコラ教育とは、権威により子どもの興味を奪うものであった。

## 2. 新教育の歴史的考察

本節では当時のフランスにおける新教育の起こりと展開を歴史的に考察する。本節ではフランスにおける新教育の歴史を探ることで、フレネの新教育への態度の理由を探る。

### （1）フランスにおける新教育の起こり

フランス革命がブルジョワジーの勝利に終わったのを契機とし、19世紀にかけ、フランスの学校は支配層を生み出すブルジョワジーのための学校と、被支配層を生み出すプロレタリアートのための学校とに複線化していった。支配層にとっての課題は被支配層の管理であった。明確な被支配層の学校では、支配命令を無批判に実行するしつけに重点が置かれた。その上、この頃時代は帝国主義の時代を迎える。帝国主義の支配機構に従属する人間を育てることが課題とされ、軍隊式の教育がなされていくことになる<sup>23</sup>。

18世紀イギリスに起こった産業革命はヨーロッパに工業化をもたらし、19世紀は工業の時代となる。そして20世紀に工業化の波は一層巨大となる。人々の生活は急激に変化し、変化による弊害も生まれてくる。その結果、人間そのもののあり方を問い直し、人間性を尊重しそれへの信頼を取り戻そうという動きが生まれる<sup>24</sup>。

1899年、ドモラン（Demolin E.）がイギリスのアボッツホルム校、ビデールズ校などを範としてロシュの学校を設立する。ドモランは学校教育が生活に対する良き準備であることを主張し、当時の中等教育校リセやコレージュのあり方を否定する。ここではこれまでの競争や体罰による強制ではなく、説得による指導を行った。こうした取り組みは目新しさを感じさせたが、ロシュの学校の目的は支配者層の再生産であり、エリート教育を推し進めたスコラ教育と共通する部分があった<sup>25</sup>。

新教育連盟（New Education Fellowship）は、1921年の第1回世界会議をフランスのカレーで行う。また1932年には第6回会議をフランスのニースで行っている。この時の新教育の特徴は山崎（2022）の言うように「運動のスローガンである自由、個性、創造性、を包摂する宗教的・政治的・社会的カテゴリーの多様性に応じた」百花繚乱の展開として現れる<sup>26</sup>。それでも新教育の発生したイギリスや、ドイツ、スイス、ベルギーといった国に比べ、フランスの新教育の進捗ははるかに遅れていたと言われる<sup>27</sup>。高度に中央集権化された国家的組織が新教育の進出を拒んだため、フランスの新教育運動の先覚者は「どれ一つとして普通の学校に対して何らの深い影響も与えなかった」という声もある<sup>28</sup>。原（2009）が指摘するように、フランスは新教育の本場ではなく、外来的性格が強かったこともあり、見るべき実績に乏しいというのが一般的な見方である<sup>29</sup>。

## (2) フランス初等教育における新教育

一方、当時のフランスで、初等教育に対し、民衆のレベルによる新教育の動きを3つ挙げるができる。1つはパリの初等教育視学官クジネ (Cousinet R.) による「小集団グループによる自由な学習」、2番目は、小学校教師プロフィ (Prift B.) の提唱による「学校協同組合 (Coopérative Scolaire)」運動、そして3番目がフレネの運動である。古沢 (1986) はこの3つの動きの共通点として3点を挙げる。学習共同体の中で集団的に学ぶ点、労働の持つ教育的価値に注目する点、さらに生徒の自主的活動に教育的意義を見出した点である<sup>30</sup>。イギリスやドイツなど、他のヨーロッパの国では、古典を重視する中等教育に対する改革が中心であった。フランスでもロシュの学校など、中等教育の動きは見られるものの、主として中等教育校からではなく初等教育の改革から新教育に関わった点にフランスの特色が認められる。

古沢 (1986) によれば、労働者階級による教育から声が湧き上がっていったのは、フランスの新教育の特徴である<sup>31</sup>。ヨーロッパにおける新教育は主知主義への反動として市民から立ち上がったものであったが、新たな支配者の育成を目指すものが多く、支配される側であるプロレタリアートにはあまり関係のないことがあった。先述のように、中央集権、エリート主義をとるフランスが中等・高等教育における新教育の進出を拒んだからこそ、初等教育を中心に新教育の広まる素地が生まれたと言えるだろう。フランスにおけるフレネ教育の初等教育への影響から言って、プロレタリアートからの声の最先端にフレネを位置付けることができる。

フェリエール (Ferrière A.) の『活動学校』、ルソー (Rousseau J.)、ペスタロッチー (Pestalozzi J.) などの著書を読み、新しい教育に目覚めたフレネは、1923年、フェリエール、クラパレード (Claparède E.)、ボヴェ (Bovet P.) らの話が聴けるのを楽しみに、スイスのモントルーで開かれた新教育連盟第2回会議に出席する。そこでフェリエールらの話に感銘を受けながらも、「新教育は子どもの活動や教育の個別化 (individualization) を可能にする教具や設備の整った学校では比較的容易で、適用しやすいものであるが、自身の勤める貧しい農村の学校では問題が全く異なることに彼は気づく<sup>32</sup>。この「大会の中で覚えた悲哀と孤独<sup>33</sup>」により、フレネは新教育の思想を理想としながらも、実践において結実する教育手法を探る道を模索していく。例えば自らの幼稚園教育を「モンテソーリ夫人が発表した幼稚園よりも合理的なものである<sup>34</sup>」とし、モンテソーリ (Montessori M.) 教育を「大人は、子どもがあらかじめもっている実験の可能性を権威主義的にことごとく摘み取ってしまう<sup>35</sup>」と批判する。また「興味の中心」を主張するドクロリー (Decroly O.) について、フレネは「ドクロリーはフランスをはじめベルギーでも彼の総括法をスコラスティックなものに変えてしまった者たちによって裏切られてしまった<sup>36</sup>」と言う。そこから、フレネの課題は「農村のプロレタリア学校でいかにして新教育の理論や成果を取り

入れた実践ができるか」という点に設定される。

ここまで、フランスにおけるスコラ教育と新教育の状況を見てきた。第1節で述べたように、フランスにおける20世紀初頭のスコラ教育は、エリート教育の重視とカトリック教義、主知主義の伝統があわさった、厳格で節制を心がける性格を持ったものであった。また、フレネにとって、新教育は、ブルジョワ教育に偏ったもの、実践面においてスコラ教育のように権威により子どもの興味を奪うものと捉えられた。彼はフレネ教育を、スコラ教育と新教育の間を探るものとし、「現代学校 (École Moderne)」と自らの教育を呼び、それまでの新教育による「新しい学校」(École Nouvelle) と区別する。こうしてスコラ教育でも新教育でもない新たな教育の方向性を探るようになっていった<sup>37</sup>。ただし、この方向性も、第3節で見る数々の転機を経て、微妙に変化していく。

## 3. フレネ教育の成立と展開

本節ではフレネの生涯を概観しながら、スコラ教育と新教育への態度からフレネの理論とフレネ教育がいかに変遷したかを考察する。

### (1) 第一次世界大戦と自由テキストの成立

1912年、フレネはニースの師範学校に入学し、1915年に第一次世界大戦のため戦地に赴く<sup>38</sup>。彼は戦地において、「私たち先生が滔々と説いたあの神の威信—科学、教育、家族、祖国—、その神が実は偽りの神であり、血なまぐさい犯罪的な神に過ぎない<sup>39</sup>。」と感じる。彼は第一次世界大戦により肺と喉に重い障害を持つ。第一次世界大戦は彼に戦争や教育への不信を抱かせ、後の教育改革の原動力となっていく。

フレネはモントルーでの新教育連盟会議の後に出した論文において、教育における2つの異なる立場を説明する。1つは教育インターナショナル (l'International de l'Enseignement) という国際的プロレタリア運動と連帯した教員達の組織であり、もう1つは新教育連盟 (Fédération Internationale pour l'Éducation Nouvelle) である<sup>40</sup>。フレネは自分を前者に位置付け、後者を「基本的に教育学、心理学の領域にとどまっている」とし、社会と学校の関係といった社会的、イデオロギー的考え方はないとする。ただ、よき教育を実現させるための諸条件として、学校建築、自然的環境を重視し、知識よりも人間形成に重きを置き、自由、相互援助、共同的活動、人間性を作ろうとする教育的努力を再編成しようとする団体である点を評価する<sup>41</sup>。

フレネはフェリエールを高く評価し、「新教育連盟に多くの助言を求めるだろうし、その人々の研究が発表される書物や雑誌の中にプロレタリア的学校の教材を見つけ出すこともあるだろう<sup>42</sup>」とし、教室においてプロレタリアートの学校に適した教育を模索する。

ある日、子どもたちが蝸牛のレースに熱中している様子を見たフレネは黒板に蝸牛のレースを元の一つのテキストを書く。

レースの興奮冷めやらぬ子どもたちは、自分たちの登場するこの短いテキストを読み、まだ字の書けぬ子どもも黒板の字を見て真似ながら、各々がノートに書き写す。しかし、子どもの興奮はつかの間そこにあるに過ぎない。黒板は消されノートはめくられ、事件の明白な痕跡は影を止めなくなる<sup>43</sup>。フレネは「この子どもたちの生活や試行を表現するテキストを何かの形で固定し、残せないものだろうか<sup>44</sup>」と考え、すぐに印刷機を注文し取り寄せる。フレネはこの印刷機の使用の良さを、「子どもの表現意欲をかき立て、その自由な表現と、これをみんなで検討し、批判することにより子ども同士の自由なコミュニケーションが活発になり、それがより明白に、より具体的な形をとって実現されること<sup>45</sup>」と述べている。また印刷機の使用により、「自由な学校共同体」の規律が自然と出来上がってきたとしている<sup>46</sup>。子どもたちは教室内外で経験した個人的な出来事や冒険などを書き留める。これらは教室で発表され討議され、添削された後で編集され、子どもたちの共同作業によって最終的に印刷される。フレネはこうした取り組みを自由テキスト (texte libre) と呼び、このテキストは学級日記 (livre de vie) や学校新聞 (journal scolaire) としてまとめられるようになる。

## (2) 学校間通信から作文集へ

1924年以降、フレネのクラスで生み出された学級新聞は、フレネと同様の考えをもつ教師と定期的に交換されるようになる。フレネはこれを学校間通信 (correspondance scolaire) と呼ぶ。しかし、こうした実践は、教師仲間から「私たちの教科書の中には、もっと別に興味深く、確固たる文学的内容をもったものがある」として、「気遣い沙汰」なものといった反応によって受け止められるのが一般的であった<sup>47</sup>。一方で、フレネの運動を高く評価する者も現れ始める。フレネは作家バルビュス (Barbusse H.) と会見し、「今はすべて下からやってくるのでなければならぬ。」という彼の言葉に意を強くする。ここでの下 (bas) は「下からの改革」を意味したものとされるが、普段教壇に立つフレネにとって、下は教壇の下にいる子どもたちのことが自然に連想された。バルビュスとの会見の後、フレネは教師の教壇を取り除き、印刷機台として利用する<sup>48</sup>。フレネはバルビュスとの会見以降、彼の行う運動に積極的に参加するようになった。

1925年、フレネは教科書批判の論文を発表する。批判は次の3点である。第1に、教科書は大人の一方的思考にもとづいて作られ、子どもは自分の生活や思考とは全く無関係な世界で、他者の思考を思考することが求められるようになる点。第2に、教科書は教師をも奴隷にし、教科書通りに画一的に伝授する癖が身につく、子どもの理解を気にかけるなくなる点。第3に、大人の思考を押し付けることにより、子ども自身の自己表現、自分の思考を押し殺してしまう点。以上から、子どもが自己を高めるのに必要なものは、教科書ではなく子どもの側から表現されるパロール、言語活動、自由な自己表現であるとする<sup>49</sup>。

同年、フレネはドクロリーの「興味の中心」理論にもとづく最新の教科書を取り上げた論文を発表する。ここでフレネは、「非常に移ろいやすく、またわれわれの生徒の生活のように地域に

より様々に異なる生活を一体誰が分類したり、一冊の本の中に固定したりできるのだろうか<sup>50</sup>」と言う。本当の興味は実際の生活の中にあるのであって「興味の中心」も「学校的インタレスト」に他ならないとして、ドクロリーの「興味の中心」に批判を加える。彼の教室において、生徒の興味により印刷された内容の主題が「興味の中心」派の人々が唱えている範囲とほぼ一致しており、印刷機だけが「生活」の実現を可能にしたと述べる<sup>51</sup>。

同年夏、西欧教育視察団の一員として、フレネは革命間もないロシアを訪れる。そこでロシアの教育原理「コンプレックス」を「プロレタリア文化の手法」と捉えたフレネは、フランスに根づくブルジョワ教育学（「興味の中心」）にプロレタリアートの教育手法を取り入れようと考えようになる<sup>52</sup>。この年フレネはフランス共産党に入党している。

1927年、フレネに賛同し学校間通信をする学校の急増により、印刷物の交換では間に合わなくなったため、それぞれ子どもたちにより学校で印刷されたものを一冊にまとめた形の冊子『麦束 (La Gerbe)』第1号が発行される。同年、特に重要とされる文章を抜粋し印刷した『麦束選集』の成功により、フレネの作文集は飛躍的に購読者数を増やしていく<sup>53</sup>。同年、フレネに賛同する者たちにより、学校印刷機運動の第1回会議がツールで開かれる。1928年にはパリで第2回の学校印刷機会議が開かれ、非宗教教育共同組合 (Coopérative de l'Enseignement Laïc - C.E.L.) が設立される。

## (3) サンポールでの取り組み

1926年にエリーズ (Élise F.) と結婚したフレネは、1928年、2人でサンポール・ド・ヴァンスの小学校に転任する。サンポールは当時貧しい農村地帯であり、学校に水もなく、便所は汲み取られておらず、長机は足がグラグラするという状態であった。フレネは荒れた学校を子どもたちと修理するところから始める。子どもたちはこうした手仕事を喜んだが、汚い言葉の応酬、けんか、怪我は毎日続出する。フレネはそうした不和に対し、力による制圧ではなく、自由な表現や共同の作業によって相互理解、連帯を生み出させる規律の確立に努める。その中で「学校協同組合」というプロフィの運動をフレネ流に適応した技術が考案されていく。1930年の機関紙「学校印刷機」において、フレネは伝統的規律を「強制された規律」とし、「自由な規律」と対比させている。規律の「唯一の基準は、子どもがおとなしく、従順であり、静かにしているか、ということではなく、彼らが熱心に、元一杯働いているか、という点にある。」と述べている<sup>54</sup>。

フレネは教科書に代わる、いつでも子どもが利用でき、子どもの個別化学習に役立てるような充分に柔軟なものの製作に取り組む。C.E.L.の仲間は項目別に本や雑誌の切り抜きを集め、13.5×19cmのカードに貼り付け、子ども向けの注釈をつけたものを500枚用意する。「協同的学校カード (Ficher Scolaire Coopératif - F.S.C.)」と名付けられたこのカードは1929年に出版され、1934年には機関誌『プロレタリア教育者』に挟み込まれる。1932年には学習カードを取りまとめたパンフレットである「学習文庫」 (Bibliothèque de Travail - B.T.) が出版され、カード同様

にフレネに賛同する多くの学校で使用されるようになる。

#### (4) サンポール事件

1932年、新教育連盟第6回会議がニースで開催される。この会議への参加者に声をかけ、フレネはニース会議の後に「サンポール教育会議」を主催する。サンポール教育会議への100人ほどの参加者の中にはパリの初等教育視学官クジネや、ドクロリー教育法の推進者デュボア (Dubois E.)、ベルギーのマヴェ夫妻 (Mawet J. et L.) のほか、ソ連のルウバキン (Roubakin N.) がいた。フレネはこの会議をニース大会には欠いていた新しい民衆教育の理念を打ち立てた意味で成功であったと評価している。しかしこの後、当時人口が1000人にも満たない農村に革命間もないロシア人が来ていたということで、「フレネはロシアのスパイ・・・」というささやきが起り始める。また同年春、機関紙「学校印刷機」は「プロレタリア教育者」と名前を変える。プロレタリアという語に攻撃性を感じる人々から反発が醸成され始める<sup>55</sup>。

同年12月、町にフレネの中傷ビラが貼りだされる。それは、学校設備の改善をしてくれない町長を殺しフレネが町長になるという夢を見たという作文を用いて授業をすることを非難する内容である。また「アクション・フランセーズ」という右翼紙にフレネを中傷する記事が出たのをきっかけに、右翼派と左翼派でフレネ非難／擁護の新聞論争が続く。議論は左右のイデオロギー対立の構図の中でフランス全土に広がっていった。サンポールで町長は公然とフレネを非難し、地主や金持ちは小作人たちに子どもを登校させぬよう圧力をかけた。

1933年、復活祭の休み明けに登校したのは40人中14人だけであった。この日、学校再開を阻もうとするフレネ反対派の組織したデモ隊が学校に押しかけ、フレネを支持する親たちが学校の門を固める中で、窓ガラスを破って乱入、発砲する騒ぎが起きる (サンポール事件)。フレネは視学官の勧めにより3ヶ月の休職をする<sup>56</sup>。

この事件はフレネとその教育法を外国へ知らせることとなる。マドリッドのクルエ (Cluet M.) とバルセロナのアルメンドロス (Almendros H.) は事件の後フレネをバルセロナに招き、バルセロナに「フレネ学校」が設立されるなど、学校印刷機はスペイン全土に広げられていく。ベルギーではマヴェ夫妻がデュボアらの援助もあり、ベルギーの「教育計画」の成立に大きく貢献することとなる<sup>57</sup>。

#### (5) フレネ学校の設立と第二次世界大戦

フレネはサンポール事件によりパール・シェル・ルーへの転勤を命じられたがこれを受け入れず、C.E.L.の実験学校を設立しようとする。ヴァンス郊外に理想的な物件を見つけたフレネは、1935年、フレネ学校の開校を宣言する。この時集まってきた子どもたちは、大部分がパリの貧しい労働者の子ども達であった。1936年にはスペイン内戦で孤児になった子ども達を10人ほど受け入れた。

1936年6月、人民戦線の盛り上がりからブルム (Blum L.)

の人民戦線内閣が成立する。文部大臣ゼー (Zay J.) は義務教育を14歳まで延長する法案を可決させ、「教育改革のための委員会」を文部省内に設置した。8月、新教育連盟の会議から、パリを中心に研究者や中等教育教師を主なメンバーとして組織される「新教育フランス・グループ」とC.E.L.の指導者が月1回の委員会を開く事が約束される。10月、ベルギーで実践された、フレネ教育法が大きく反映された学習計画を元に、フレネは「フランスの学習計画」として、学級の生徒数の上限や義務教育の延長などを提案した。この提案は新教育フランス・グループを通じて「教育改革のための委員会」に伝えられ、一連の教育改革の参考とされたと言われている。改革の中で、公的にフレネの意見を参考にしたと明言されることはなかったが、フレネやC.E.L.の名声は徐々に高まっていく。

1939年の第二次世界大戦の始まりにより、教師たちは次々と動員され、C.E.L.も活気をなくしていく。混乱の中で「フレネはスパイ」というデマが蘇り、1940年、陸軍の機動隊により強制収容所に送られる。フレネはこの強制された余暇の中で過去20年の教育実践を振り返り、「仕事の教育 (l'Éducation de travail)」 「フランスの現代学校 (l'École moderne française)」 「感覚心理学試論 (Essai de psychologie sensible)」といった後の主著と呼ばれる論文を書き記す。

1940年ドイツ軍がパリに入城、第3共和制は消滅、「フランス国家 (Etat Français)」が生まれ人民戦線の諸改革を否定し、国家主義的教育が推進される。翌年、フレネは収容所から保釈され、1943年から軍事的任務を受ける。1944年、ド・ゴール (Gaulle C.) 将軍がパリに入り、首都解放が宣言される。ド・ゴールを首相とし、「教育改革研究委員会」が設置され、教育改革への動きが始まるが、この戦後の改革案作りにフレネやC.E.L.は全く招かれなかった。

#### (6) フレネの戦後の取り組みとフレネの死後

1945年、機関紙「教育者 (Éducateur)」が再刊される。ここでは「プロレタリアート」の表現は控えられる。同年『フランスの現代学校』が、1946年には『仕事の教育』が出版される。『フランスの現代学校』において「興味の複合」が主張され、戦後「興味の複合」の開拓のための学習材が開発されていく。この年の論文でフレネは「フランスで彼 (筆者註：フェリエール) がカトリックやブルジョワの運動を好んだことにはいつも驚かされる」とし、フェリエールがC.E.L.に非協力的であったことを批判している<sup>58</sup>。

1947年、フレネ学校は再開され、サンポール事件をテーマとした映画「緑の学園」が製作される。この頃から多くの見学者が外国からも訪れるようになる。

1950-54年、フレネはフランス共産党の知識人から度々批判を受ける。批判の内容は、時代遅れの田舎の理想に基づいた学校という概念を推進した、教師の役割を軽視している、内容よりも過程を重視している、といったものであった<sup>59</sup>。C.E.L.は教材開発を「商業的教育学」と批判され、純然たる教育学研究の機関と

して、1951 年、「現代学校共同研究所 (I.C.E.M)」が設立される。C.E.L は教材の製造販売のための別会社として役割を分離する。1954 年、フレネはフェリエールとの往復書簡により、子どもの興味の成長段階について意見を交わしている<sup>60</sup>。1958 年、ブリュッセルで、フレネ教育運動の国際組織として「現代学校運動国際連盟 (F.I.M.E.M)」が設立される。1960 年代には低学年においてドクロリーの「興味の中心」の活用を推進し、フェリエールに対しても多大な影響を受けたことを度々述べている<sup>61</sup>。この頃、フレネは学習系統性を重視し、スコラ教育を主張する教師にも受け入れられる学習材を多く開発するようになる<sup>62</sup>。

1966 年フレネはヴァンスの自宅で永眠。1968 年、「五月革命」が起こり、現代学校運動は高揚し、「現代学校運動憲章」が満場一致で採択される。同年、F.I.M.E.M 主催による、フレネ教育者国際集会 (Rencontres Internationales Des Éducateurs Freinet – R.I.D.E.F) が開かれる。R.I.D.E.F は 80 年までは毎年開催、82 年からは隔年開催となり、現在も世界中から参加者が集まっている<sup>63</sup>。

1975 年のアビー改革では、学校が「現代世界に開かれる」べきことをうたい、生徒や親の参加になる「学校共同体」の設立を求め、「各々の生徒のリズムで」読み書きを習得させるべきなど、フレネが熱心に求め続けた方向性がフランス国内において実現されてきている<sup>64</sup>。

## おわりに

以上に述べたように、フランスにおける 20 世紀初頭のスコラ教育は、厳格で節制を心がける性格を持ったものであった。また第 2 節で述べたように、その中で生まれた新教育も、ブルジョワ教育に偏ったもの、実践面においてスコラ教育的なものとフレネは捉えた。彼は特に戦前において、スコラ教育と新教育から距離を置き、プロレタリア教育に大きく偏る形で、思想を形成し、フレネ教育を推進した。しかし上に挙げた契機などを経て、プロレタリア教育への傾倒は鳴りをひそめ、スコラ教育、新教育ともに、その一部を容認し、共存を目指すものに変化していく。変化の契機として大きく言って次の 4 つが挙げられる。

### 1) 第一次世界大戦による怪我

1915 年、第一次世界大戦により戦地に赴き肺に重症を負ったことはフレネの変化の契機となった。大きな声で叱ることができないフレネは自然とスコラ的伝統教授法に強い疑問を抱いていく。

### 2) モントルー会議への参加

1923 年の新教育連盟モントルー会議への参加も大きな契機である。この大会への参加により、新教育的な考え方への立場は、批判しつつも良い部分は取り入れようという両義的なものとなった。ブルジョワの教育学から良いところを取り入れつつもプロレタリア教育を自認するという方向性を形作っていく。

### 3) サンポール事件

1933 年のサンポール事件も大きな契機となった。この事件に

より、フレネは「私たちは教育者であって政治家ではない<sup>65</sup>」として、左右の対立に関わらず、教育者としての道を選ぶ決意をする。この辺りから、プロレタリア教育との関係にも変化が見られ、戦後の機関紙の題名にはプロレタリアの文字がなくなる。フレネは 1926 年に共産党員となったが、1952 年に共産党を辞め、小学校教師として政治的ではなく教育的であることに注力する。事実、戦後の論文にはソ連や「コンプレックス」についての言及はほとんど見受けられない。

### 4) 第二次世界大戦後のフレネ教育批判

第二次世界大戦後のフレネ教育批判はフレネに影響を与えている。フレネは戦前にはスコラ教育と新教育に対して強い批判をすることもあった。「現代学校」と自らの教育を呼び、それまでの新教育による「新しい学校」と一線を画すようになる。一方で戦後、スコラ教育や新教育に対する強硬な態度は薄れていき、フランス全土や外国への教育活動をより一層推し進めるようになる。1960 年代には教授テープの開発など、スコラ教育を主張する教師にも受け入れられる学習材を多く開発するようになる。またこの頃、ドクロリーの「興味の中心」やフェリエールの教育論を進んで支持するようになる。

本稿ではフレネの思想の変遷について、スコラ教育と新教育の影響から考察したが、こうしたフレネの変化が自身の行った実践といかなる影響を与え合い変化していったかについて論じたかについては、彼が重視した「興味」(興味観)をはじめとする理論の変遷や、公立学校でも有効な実践開発として推し進められたフレネの教育技術の変遷の詳細な研究が必要であると筆者は考える。今後の課題としたい。

- <sup>1</sup> Freinet C., « Plus de manuels scolaire! Plus de leçons! », *Clarté*, n°75, juin 1925 (宮ヶ谷徳三訳『仕事の教育』明治図書出版、1986年、130頁)。
- <sup>2</sup> 同上書、130頁。
- <sup>3</sup> 宮ヶ谷は、スコラ教育 (scolastique) について次のように述べる。「スコラ (scola) とはラテン語で『学校』の意。中世の神学校では哲学そのものよりも、むしろ文献の注釈、分析の方法が重んじられ、これはスコラ哲学、教壇哲学と称されている。フレネはこの語を現実の世界から遊離した伝統的学校固有の教育法——斉授業、宿題、罰といった不毛な因襲的方法全体を漠然とさす、けなしことばとして使っている」(Freinet C., : *L'Education du travail*(1946)ed, Delachaux et Niestle, Neuchatel, 1967, *Moderniser l'École*, Bibliothèque de Moderne, C.E.L, 1960. (宮ヶ谷前掲書、269頁)。
- <sup>4</sup> 同上書、10頁。
- <sup>5</sup> 同上書、288頁。
- <sup>6</sup> 上垣豊著『規律と教養のフランス近現代—教育史から読み直す—』ミネルヴァ書房、2016年、165-166頁。
- <sup>7</sup> 神山栄治『フランス初等教育史 1830-1845』三重大学出版会、2022年、434頁。
- <sup>8</sup> 志村鏡一郎「ブルジョア自由主義の教育政策」『世界教育史大系フランス教育史II』講談社、1978年、92頁。
- <sup>9</sup> 同上書、95頁。
- <sup>10</sup> 江藤恭二、木下法也、渡部晶『西洋近代教育史』学文社、1979年、199頁。
- <sup>11</sup> 志村前掲書、103頁。
- <sup>12</sup> 同上書、110頁。
- <sup>13</sup> 佐藤英一郎「第三共和国成立・発展期の教育」『世界教育史大系フランス教育史II』講談社、1978年、119頁。
- <sup>14</sup> 同上書、138頁。
- <sup>15</sup> 尾上は、第三共和政における教育改革を推進したビュイッソン (Buisson F.) についての詳細な研究をもとに、ウィーン万博やフィラデルフィア万博を元に彼が学んだ「直観的」方法を、フランスの教育三大原理に盛り込んだことを明らかにしている(尾上雅信『フィデルナン・ビュイッソンの教育思想—第三共和制初期教育改革史研究の一環として—』東信堂、231頁)。
- <sup>16</sup> 佐藤前掲書、204頁。
- <sup>17</sup> 同上書、204頁。
- <sup>18</sup> 波多野完治「フレネのこと」(フレネ教育研究会編『フレネ教育法に学ぶ』黎明書房、1986年、7頁)。1900年頃の政策による。現在では軟化している。
- <sup>19</sup> 続けて古沢は明治中期の日本の様子を挙げ、軍事教育の予備機関としての学校利用という形態が同時代のフランスと類似していることを指摘している(古沢常雄「フレネ教育学の教育史的位置」フレネ教育研究会編『フレネ教育法に学ぶ』黎明書房、1986年、118頁)。
- <sup>20</sup> 小林順子『21世紀を展望するフランス教育改革 —1989年教育基本法の論理と展開—』東信堂、1997年、12頁。
- <sup>21</sup> Freinet C., : *L'Education du travail*(1946)ed, Delachaux et Niestle, Neuchatel, 1967, *Moderniser l'École*, Bibliothèque de Moderne, C.E.L, 1960. (宮ヶ谷前掲書、14頁)。
- <sup>22</sup> Freinet C., « Moderniser l'École », *Bibliothèque de l'École Moderne*, C.E.L. 1960 (同上書、1986年、239頁)。
- <sup>23</sup> 同上書、117頁。
- <sup>24</sup> 西村皓「新教育運動の教育史的位置 (2 ヨーロッパ)」長尾十三二編『新教育運動の歴史的考察』明治図書、1988年、162頁。
- <sup>25</sup> 古沢前掲書、124頁。
- <sup>26</sup> 山崎は、しかし、新教育連盟設立者のエンソア (Ensor B.) により各国の多様な教育方法論を無制限に受容したため、平和社会の建設という目標が拡散していく土壌を産んだとしている(山崎洋子『イギリス新教育運動の生起と展開—教師の自立性と専門職化の歴史—』知泉書館、2022年、73頁、84頁)。
- <sup>27</sup> W.ボイド、W.ローソン『世界新教育史』玉川大学出版部、1966年、183頁。
- <sup>28</sup> 同上書。
- <sup>29</sup> 原聡介『フランス教育の伝統と革新』大学教育出版、2009年、44頁。
- <sup>30</sup> 古沢前掲書、125頁。
- <sup>31</sup> 同上書、124頁。
- <sup>32</sup> 宮ヶ谷前掲書、28頁。
- <sup>33</sup> 同上書、29頁。
- <sup>34</sup> Freinet C., *L'École moderne Française*, Rossignole, 1946 (宮ヶ谷徳三訳『新装版 手仕事を学校へ』黎明書房、2010年、31頁)。
- <sup>35</sup> 同上書、317頁。
- <sup>36</sup> Freinet C., *Les techniques freinet de l'École moderne*, Armand Colin, 1964 (石川慶子、若狭蔵之助訳『フランスの現代学校』明治図書、1979年、16頁)。
- <sup>37</sup> Freinet C., « Moderniser l'École », *Bibliothèque de l'École Moderne*, C.E.L. 1960 (宮ヶ谷前掲書、224頁)。
- <sup>38</sup> 同上書、14頁。
- <sup>39</sup> 同上書、16頁。
- <sup>40</sup> フレネの言う「新教育のための国際連盟」(Fédération Internationale pour l'Éducation Nouvelle) は前述の新教育連盟 (New Education Fellowship) と同一の団体である。本稿では「新教育連盟」で統一して表記する。
- <sup>41</sup> 同上書、29-30頁。
- <sup>42</sup> 同上書、30頁。
- <sup>43</sup> 名和前掲書、41頁。
- <sup>44</sup> 宮ヶ谷前掲書、30頁。
- <sup>45</sup> 名和前掲書、1985年、33頁。

<sup>46</sup> 同上書。

<sup>47</sup> 宮ヶ谷前掲書、37 頁。

<sup>48</sup> 教壇の撤去について、宮ヶ谷は教師がフレネ教育法を実践する契機としての象徴的行為であると述べる（同上書、39 頁）。

<sup>49</sup> 同上書、41 頁。

<sup>50</sup> ドクロリーの教科書は子どもたちの興味を中心となるべきテーマを季節を追って配合し、各々を順次学習してゆくという一種の合科的学習法の教科書であった。同上書、42 頁。

<sup>51</sup> Freinet C., « Contre un enseignement livresque-l'Imprimerie à l'école », *Clarté*, n°75, 1925（同上書、43 頁）。

<sup>52</sup> Freinet C., « Vers l'école du proletariat », *Clarté* n°47, 1923（宮ヶ谷前掲書、100-106 頁）。坂本明美「セレスタン・フレネにおける「興味の複合」の試みー1920 年代ー1950 年代を中心にー」『フランス教育学会紀要』第 13 号、2001 年、22 頁。

<sup>53</sup> 1932 年には 2200 校、1948 年には 1 万校、2,30 万人の子どもたちがフランス国内外において作文集を読んでいるとフレネは記している（Freinet C., « Les journaux d'enfants » *L'éducateur* N°11, 1940, p.178）。

<sup>54</sup> Freinet C., « Les manuels scolaires », *Clarté*, n°73, 1925（宮ヶ谷前掲書、52 頁）。

<sup>55</sup> 同上書、58 頁。

<sup>56</sup> 名和前掲書、192-214 頁。

<sup>57</sup> 宮ヶ谷前掲書、62-64 頁。

<sup>58</sup> Freinet, C., « Prises de positions », *l'éducateur* n° 9, 1946.

<sup>59</sup> Wayback M. « History of Freinet Pedagogy », <https://web.archive.org/web/20111009143802/http://www.freinet.org/icem/history.htm>, archived 9 October 2011.

<sup>60</sup> Ferrière A. et Freinet, C., « Quelle est la période la plus favorable à l'Education? », *L'éducateur* n°3, 1954.

<sup>61</sup> Freinet C., « Adolphe Ferrière n'est plus », *l'éducateur*, n°1, 1960.

Freinet C., « Les techniques freinet de l'école moderne », Armand Calin, 1964（石川、若狭訳前掲書、23-24 頁）。Freinet C., « L'exploitation pédagogique des complexes d'intérêt », *Dossier pédagogique de l'École Moderne* n°9, 1965.

<sup>62</sup> 例えば「教授テープ (bandes enseignantes)」はこれまでフレネや C.E.L が作成してきた協同的学校カードや自己添削カードを元に、自主的に学べるよう单元ごとに繋げてテープになっており、テープを教授ボックスに入れボタン操作でテープが前後するようにしたものである。これにより学習单元に沿った個別の学習が可能となる（Freinet C., « Bandes enseignantes & programmation », *Bibliothèque de l'École Moderne* n°29-32, 1964）。

<sup>63</sup> 村田栄一『授業からの解放 フレネ教育運動の試み』雲母書房、1994 年、12-13 頁。

<sup>64</sup> 宮ヶ谷前掲書、91 頁。

<sup>65</sup> 同上書、66 頁。